

『エルズルム紀行』について

米 川 哲 夫

プーシキンがエルズルム遠征軍に従軍する旅行をした1829年5月から同年8月までの時期は、1836年に発表された『1829年の遠征時のエルズルム紀行』（以下『紀行』と略記する）があるため、プーシキンの生涯のなかでも彼の行がかなり詳細に判っている時期である。しかし旅行の動機ないし目的については、プーシキン自身は『紀行』のなかでは一言も述べておらず、手紙その他でも、のちの研究者を満足させるような発言を残していない。従って、この問題に関して研究者はさまざまな見解を述べているのである。この小論の目的は、私なりの仮説をたてることを試みて、批判をあおぐことにある。⁽¹⁾

まず整理の便宜上、機械的ではあるが、目的を動機と切り離し、プーシキンをエルズルム行にかりたてた動機の検討から始める。

旅行の動機についての学者の見解は、『побег』（以下「脱走」とする）説と『тоска』（以下「タスカー」とする）説とに分けられる。たとえば岩間徹氏は、『絹のくさり』につながれたプーシキンは「苦しまぎれに……衝動的にとび出した……場所を変えて自由に呼吸し……肉体を動かして精神の病いをいやそうとしたためであろう」⁽²⁾と云っている。これとほぼ同じ見解をシモンズもっている。⁽³⁾ トゥイニャーノフは「許可なしで行われたプーシキンのこの旅行は、実現しなかった一連の脱走についての思いのなかに入る」⁽⁴⁾と述べている。グロスマンの見解もこれと同工異曲である。⁽⁵⁾ アンリ・トロワイヤも「転換と再生の必要」とか「行動への欲求」⁽⁶⁾を旅行の動機としている。以上が「脱走」説と仮称したものである。

「タスカー」説⁽⁷⁾とは、ブロツキイの見解で代表されるような説である。ブロツキイは云う。「うちに秘められた苦悩」「タスカーを詩人はどうして鎮めていいか、そのすべが分らなかった。その不安の外面にでた反映が、彼の漂泊の生活、『あてどなき放浪の旅』…足のむくまま逃げようという希求であった」。⁽⁸⁾そして1827年から1830年までをプーシキンの「漂泊の時代」⁽⁹⁾と規定し、それと別個に旅の目的をあげることはしていない。ブラゴイもブロツキイとほとん

ど同じ見解をしめしている。⁽¹⁰⁾

この二つ以外に結婚申込みが受入れられなかったことを動機としている学者⁽¹¹⁾もいるが、結婚申込みは5月1日であるのに、カフカス行の意志はすでに3月はじめにきまっているのだから、これは問題としなくてもよいであろう。ただこの場合、結婚が承諾されたら旅行は取りやめられたかどうかという疑問は問題として残る。⁽¹²⁾

以上2つの説は「脱走」にせよ、「タスカー」にせよ、プーシキン の内的欲求に旅行の動機を求めているものであり、その限りでは両者は同じものを別の表現で（ニュアンスの差はあるが）表わしたともいえ、二説の間に大きな差異はなく、⁽¹³⁾ 従って積極的な異論をたてる必要はないと考える。しかし、両説ともにプーシキンの生涯に何回もあった外国行の企て（国内の旅についてもあてはまる面がある）の多くのものにも通用するものであろうし、それだけではエルズルム旅行の理由を十分に説明したとは云いがたい。それだから大部分の研究者は動機のほかに、旅行の目的をさぐろうとするのである。

目的について金子幸彦氏は「プーシキンをカフカスにさそったものは、対トルコ戦争への従軍ばかりでなく、また同地で多くの友人に会うことであった」とし、注として「国外へ逃亡する計画をもっていたとする 説がある」⁽¹⁴⁾と指摘している。金子氏のあげた2つの目的と国外逃亡のほかに、賭博が目的だったという説があるが、これは論外にしてよいと思う。⁽¹⁵⁾ したがって旅行の目的は、従軍、友人と会うこと、海外逃亡の3つの説にしぼられ、このすべてを列挙している学者もいる。⁽¹⁶⁾

国外逃亡説は金子氏が注に引用しているトゥイニャーノフの主張であり、トロワイヤもそれらしい表現をしているが、いずれもきわめて慎重な態度で明確なる断定はさけている。⁽¹⁷⁾ 友人に会うという目的は、シモンズも岩間氏も主張しているが、岩間氏はさらに進んで、何のために友人に会いたがっていたのかという問題に回答をだして、「追放解除いらい、おそらく1日として彼の心を落着かせなかったデカブリストへの思いが、また《12月14日》について書こうという思い」がカフカスへ詩人を向わせたのではないかと主張している。⁽¹⁸⁾ 従軍を目的に挙げている学者は、金子氏のほかにブラゴイ、シモンズ、トロワイヤがあり、とくにブラゴイは1828年に政府が従軍許可を与えなかったことと関連づけて「彼に与えようとしなかったものを自分自身で手に入れること、つまりロシア軍のところへいくことを、疑いもなく目論んで」いたと主張している。⁽¹⁹⁾

しかし、従軍にも色々の形がある。ただ戦争を見るためか、あるいは自ら戦うためか。また友人に会うというのも、とくに目ざす人があったのかどうか。これらの問題に答えるために、『紀行』の序文の検討にとりかかる。

『紀行』の序文は『ソヴレメンニク』誌第1号に発表されたもの（以下《S》と称す）と、その直接の原稿（《PA》とする）、さらに2つの草稿が、つまり4つのテキストが現存している。これらを総合すると、プーシキンの構想では、序文は(1)旅行の理由の説明、(2)国内の批評家の非難に対する反論、(3)フォンタニエの発言に対する論駁、の3つの部分からなるはずであった。しかし、《PA》では(2)のほぼ全部が削られており、《S》では(3)のみが残されている。つまり小論の関心の対象となる(1)の部分は、《S》をのぞく他のすべてのテキストに含まれていて、若干の語句の相違をのぞいて論旨は同じである。

目的地はカフカスの鉱泉地であったが、チフリスが近いので弟や友人に会いに寄ってみたいとなった、しかし着いてみると軍隊は出発したあとだった、戦争とほとんど未知の地方を見たいという希望にかられて、パスケーヴィチ将軍に従軍許可を願いでた、そうしてエルズルム占領を見たのだ、というのである。このエルズルム旅行の理由づけは、帰国後ベンケンドルフは求められて提出した公式の釈明書（1829年11月10日付の手紙）のものとほぼ同一である。それから5年あとに公表するために書いた序文²⁰が公式釈明書とくい違うことは、プーシキンには許されることではなかったのである。

プーシキンはエルズルム旅行を、序文でも釈明書でも3段階にくぎっている。しかし実際には、2段階であった。そのことは、3月5日にチフリス往復の駅場券をペテルブルグでとっていること、また旅行メモに鉱泉地にいたのは「3時間ほど」（VIII, 1031）だったと書いていることから明白である。だから第1稿にある鉱泉地に「治療のために出かけた」（VIII, 1021）という理由は、あまりにも見えすいた口実であり、²¹ プーシキンもそれを自覚して第2稿以下で削っている。

ではチフリスにいった弟と友人に会うという理由はどうか？ ここで注目したいのは、第1稿に「何人かの友人と、当時ニジェゴロド竜騎兵連隊に勤務していた弟」（VIII, 1022）と書かれているのに対して、第2稿では友人と弟の順が逆になり、勤務連隊名が削られている（VIII, 1024）こと、さらに《PA》では「弟」があとから書きこまれている（VII, 1024 脚注4）こと、²² さらに本文第2章で「チフリスでラエーフスキイに会えると思っていた」（VIII, 457）と

弟がぬけていることである。

第2稿から弟を友人の前に出したのは、弟に会うことを最大の理由にもち出すためではなかったか。例の釈明書では、弟とは「5年間も離ればなれになっただけで」弟に会いに「チフリスに行ってくる権利がある」²³⁾と考えたと書いて、友人に会うためとは一言も云っていない。当局の許可なしで決行した旅行の理由としてはいちばん有力な理由である。カフカス勤務にまわされた旧デカブリストに友人の多いプーシキンが、友人に会いたかったと云えば、当局の嫌疑はまずばかりである。だからプーシキンも釈明書には友人に関しては、「少年時代の親友」のラエーフスキイに従軍許可の仲介を依頼したとしか書かなかったのである。

しかし、《PA》で「弟」がはじめ抜けていたこと、本文で弟ではなくラエーフスキイがでてくることが、さらにプーシキンがグルジア行の希望をはじめてもらした1827年5月8日の弟あての手紙に「お前のすばらしい目のためではなく、ラエーフスキイのために」（書簡Ⅱ，34）行くのだとある発言とをあわせて考えると、プーシキンは弟にも会いたがっていたが、少くともそれと同程度に、むしろそれ以上にニコライ・ラエーフスキイに会いたがっていたのではないかと推測される。序文第1稿にある弟の勤務連隊名は、その隊長であったラエーフスキイを暗示しているようにも見えるのである。手紙でも文学論をたたかわせ、また1820年の旅行の心よい思い出と結びつく²⁴⁾ラエーフスキイが、プーシキンのなかでカフカスといかにひとつに結びついていたかは、彼に献げた『カフカスのとりこ』の自筆写本をわざわざ旅行にたずさえていったという事実からも推測できると思う。²⁵⁾ しかも旅行の時期は、彼に献げた詩『アンドレ・シェニエ』にまつわる事件が片づいてから、1年もたっていないのである。

では従軍の希望はチフリスで生れたものであろうか。従軍許可を待つあいだに書かれた手紙からはこの問題の回答は見つからないが、チフリスまでの道中を「かなり退屈なもの」²⁶⁾だったと書いている。それが従軍してからは「きわめて愉快」と知らせている。²⁷⁾ また軍隊の野営地に到着した日に、エム・プーシキンにあうなり、「あれほどの障害があるのにここまでやってきた、その目的のもの」「武器を手にして突進してくるトルコ兵」²⁸⁾を見せてくれととびついてきたと云う。

1年まえに従軍願いを出して却下されたとき、プーシキンは絶望のあまり食事も睡眠もとれずねこんでしまったと、同時代人が伝えている（書簡Ⅱ，287—

288)。従軍中は彼はたんなる戦争の傍観者ではなく、自ら認めているように「なかば兵士」(書簡Ⅱ, 67)であった、あるいはた然とした。6月14日の戦闘にプーシキンが参加した²⁹⁾ことは、『紀行』第3章の叙述(VII, 467)からは読みとれないが、槍を手にした乗馬の自画像と詩作³⁰⁾に見ることができる。これらのことは、プーシキンがただ友人にあうために軍隊にきたのではなく、従軍そのものを目的にしていたことを物語っているのではなかろうか。

プーシキンの大胆な戦闘参加という行動を、エム・プーシチンは「アフリカ人の血が湧きたつ」³¹⁾ためとその場の衝動的な行為としてとらえ、シモンズは彼の従軍を軍人の生涯を送りたいというふるい志の名残りがまだ消えていなかった³²⁾とリツェイ卒業時の希望と関係づけてとらえている。がしかし、プーシキンに従軍に、さらに戦闘参加へといざなった真のものは、戦争一般ではなく、とくに1828—29年の戦争、つまり対トルコの戦争であったのではないか。

かつて1821年に「もし戦争が始まる希望があるようなら、どうか私をベッサラビアに残しておいてください」³³⁾と云い、ギリシア独立のため戦おうと考えたプーシキンの希望は、まだ生きつづけていた。彼にとってトルコは、まだ依然として「もっとも野蛮な専制主義とあらゆる後進性の同義語であった」³⁴⁾のではなかろうか。1829年のプーシキンが、その時の戦争をギリシア独立との関係で見えていたことは、アドリアノーブル条約締結(9月22日)のころ作られた詩から明白である。³⁵⁾

プーシキンは、最初から戦闘にも参加するつもりであったと推量することができると思う。³⁶⁾

次にデカブリストと旅行との関係の問題にうつろう。³⁷⁾ さきに私は、プーシキンがいちばん会いたがっていたのは、ラエーフスキイであろうと推定したが、それはもちろん、ほかの友人に会いたくなかったと云うのではない。カフカス軍のなかには、リツェイの同窓生ヴォリホフスキイや同じ同窓の親友の弟エム・プーシチンをはじめ、何人も友人がいたこと、しかもその友人たちが、ずっとプーシキンの心から離れなかったデカブリスト運動の参加者であったことが、プーシキンのカフカスへの傾斜をいっそう強くしたのだと考える。プーシキンは彼らにも会いたかったであろうし、彼らに会えば運動の色々な回想が聞けるとも思ったであろうが、しかしそのこと自体が旅行の目的だったとは思えない。

第1に、プーシキンのカフカス行の希望は終始一貫したものではない。³⁸⁾

第2に、プーシキンのデカブリストについての旅行前の発言、旅行中の発言、

それに『オネーギン』第10章の3つは、それほど直線的につながるものではない。ヴリフの記録によるとプーシキンは、1827年9月に「今ではもうニコライ時代についても、12月14日についても書いていいのではないか」と云っている。これは、カラムジンの『歴史』の感想から始まって「ピョートル1世の歴史は必ずかく。アレクサンドル帝の歴史はクールプスキイの筆でかく。現代の出来事は、われわれを援用できるように、必ず記述されるべきだ」^[99]に続くものである。

「12月14日」についてかくプランをもってエルズルム旅行に出かけたという論拠としてだされるのは、ユゼフォーヴィチの回想である。彼によると、カフカスでプーシキンは『オネーギン』の「最初の構想に入るすべてをかなり詳しく説明してくれた。それによるとオネーギンはカフカスで死ぬか、デカブリストになるかは必ずであった」^[100]という。この唯一の証拠は、ボンジも指摘するとおり、プーシキン自身が小説の結末の選択にまよっていたのか、ユゼフォーヴィチが正確に記憶していなかったのか、いずれにも読みとれるし、^[101]「最初の構想」というユゼフォーヴィチの記憶が正しいかどうか不明である。プロツキイは「このプランは……カフカス訪問と……デカブリストとの会合が作者に教えたのかも知れない」^[102]と、従軍中にこのプランができたという見解をとっている。私には、このプロツキイの解釈のほうが無理がないように思われる。

最後に、エルモーロフ将軍訪問の問題を考えたい。なぜプーシキンは、モスクワから直接ヴォローネジに行く普通のコースをとらずに「200露里の廻り道」(VIII, 445)をして、退職を強いられて隠棲中の将軍をたずねたのか。従軍にさきだって戦争の見通しと、司令官パスケーヴィチのことや軍事方面の話が権威者から聞けるだろうと考えたからかも知れないが、^[103]それ以上にエルモーロフに対する並々ならぬ関心そのものがプーシキンにあったからだと考えたい。彼のエルモーロフに対する関心は1820年のカフカス旅行にはじまり、死ぬまで絶えることがなかったのであり、とくに後年は、エルモーロフの「ザカフカス戦争の記述」^[104]を真剣に考えているからである。

この場合、『紀行』のなかに「手記」つまり回想記について述べたところが、第1章の将軍との会見の項で2箇所(VII, 445, 446)と、第2章のグリボエードフの項で1箇所(VII, 462)あることに注目したい。これと前に引用したヴリフの記録とをかさねて考えると、プーシキンは何かエルモーロフのことを書こうと思って訪問したのではないかと推測できるのではないか。それは、あるい

は「手記」であったかも知れない。プーシキン⁽⁴⁾の自伝的手記はあまりにも有名であり、エルモローフのことが1812年の項や1820年のカフカス旅行の項でふれられることになっても、不自然なことではない。あるいは「アレクサンドル帝の歴史」に関連があるのかも知れない。彼はアレクサンドル時代の人であるから。

デカブリストのことも、『オネーギン』第10章とのみ結びつけて考えなくとも、『自伝』との関連でとらえることができよう。

結論としてまとめれば、第1にプーシキンは「故国のトルコ」⁽⁵⁾、「聖なるルーシ」⁽⁶⁾から離れたかった。第2に戦争が見たかった、そしてできれば戦闘に参加したかったのだと考える。そのために選ばれたのが、バルカン戦線ではなくカフカスであったのは、そこにラエーフスキイがいたからであり、またそこが様々な思い出（デカブリストへの思いをふくめて）と結びつくからである。

国外逃亡については考察する余裕がなかったので、ここで一言ふれておきたい。プーシキンが『序文』のなかで（《S》をのぞく）「あまり知られていない地方を見たいという希望」（VII, 1022, 1024）を旅行の理由にあげていることと、「底にいっぱい書類〔手稿〕の入った行李」⁽⁷⁾をもって旅行していたことをあわせて考えてみると、彼はあるいは軍隊とともにコンスタンチノーブルに行けると期待していたとする推量も可能である。⁽⁸⁾ 帰路にながらく夢見ているパリとうをまわる長期の旅行を考えていたのかも知れない。詩『オレグの盾』には、その夢が実現できなかったなげきがこめられているのかも知れない。

以上の結論は仮説にすぎない。それに、少ない資料のごく一部を、しかも多くは引用でしか見していない。しかし、すべての資料にあたっても、この問題はチェーホフのサハリン行の動機と同じように、決定的な解答が不可能な問題なのかも知れない。

なお、エルズルム旅行はプーシキンの貴族としての自覚と結びつく面があるように見えるが、これはまた別の機会にふれたい。⁽⁹⁾

注(1) Я. Л. レフコヴィチは、『紀行』の研究はプーシキンの思想的・政治的立場の分析の観点からとか、ロシア紀行文学における位置とか、または散文におけるリアリズム形成の問題という側面に集中しているが、自伝という面からの接近も可能であり、「何がプーシキンをカフカス旅行、その行程に誘いだしたのか、なぜ考えていたより早くエルズルムを立ち去ったのか」という問題を一例として指摘している。

《Пушкин. Итоги и проблемы изучения》. 1966, 《Наука》, стр. 528. の注参照。

(2) 岩間徹『プーシキン』1962, 誠文堂新光社, 203—204ページ。

- (3) E. J. Simmons. Pushkin. 1937, Harvard U.P., p. 288, 298—299 参照。
- (4) Ю. Н. Тынянов. Пушкин и его современники. 1969, 《Наука》, стр. 193.
なお、彼のテキスト研究は現行の『紀行』テキストの確定に貴重な寄与をしている。
トゥイニャーノフ、前掲書の注、399—400ページ参照。
- (5) Л. Г. Гроссман. Пушкин. (Жизнь замечательных людей). 1958, М., стр. 328参照。
- (6) Н. Troyat. Pushkin. 1951, Victor Gollanz, p. 283. なお、本書はフランス語版全2巻の英訳で、1巻に縮小されている。
- (7) 「お許しあれ、何と訳していいのやら私には分りかねます」(『エヴゲーニイ・オネーギン』第8章14, 木村彰一訳)。
- (8), (9) Н. Л. Бродский. А. С. Пушкин. 1937, 《Худож. лит-ра》, стр. 554.
- (10) Д. Д. Благоев. Творческий путь Пушкина (1826—1830). 1967, 《Сов. писатель》, стр. 346参照。
- (11) Гроссман, 前掲書, 328ページ参照。彼は、結婚申込みが拒絶されたときに相手の住む町から立去るのが当時の慣習であったと指摘している。
- (12) Трoвайяは「結婚するにふさわしい好ましい女姓にめぐりあえたら」旅行計画は放棄されただろうと云っている(トロワイヤ, 前掲書, 284ページ)。П. О. Морозовは、モスクワで結婚申込みをし、もし断わられた場合にはカフカスに立つつもりであったと書いている(Сочинения и письма А. С. Пушкина. Изд. 《Просвещение》, т. 6, стр. 667.—以下《Просвещение》т. 6と略す—参照)。
- (13) それにしても「脱走」や「タスカー」にプーシキンをいたらしめた理由、状況の説明には研究者によってかなりの相違がある。概括的にいえば、ここで扱っている時期については、西欧の学者は女姓をめぐる問題にアクセントを置いているのに対して、ソ連の学者は政治的、社会的環境を重視するという傾向が見られる。しかし、この問題はここでは論じないことにする。
- (14) 金子幸彦『プーシキン』1948年、日本評論社、213ページ、注341—342ページ。なお、金子氏は動機についてはまったく触れていない。
- (15) 賭博旅行説は、ブルガーリンが3月にベンケンドルフにあてた手紙のなかで主張している(《Просвещение》т. 6, стр. 669参照)。これは岩間氏(前掲書, 203ページ)もシモンズ(前掲書, 301ページ)も否定している。なお旅行中のプーシキンの賭博については、帰路のことをミハイル・プーシチンが回想に書いている(М. И. Пущин. Встреча с Пушкиным за Кавказом. 《И. И. Пущин. Записки о Пушкине. Письма》, 1956, 《Худож. лит-ра》, стр. 368—370参照)。
- (16) Гроссман, 前掲書, 328, 331, 340ページ参照。
- (17) Туйниャーノф, 前掲書, 193ページ, Трoвайя, 前掲書, 283ページ参照。
- (18) 引用は岩間徹, 前掲書, 204ページ。シモンズは弟レフとニコライ・ラエーフスキイの名前をとくにあげている(前掲書, 301ページ参照)。
- (19) 引用はブラゴイ, 前掲書, 346ページ。シモンズは「彼の目的地はカフカスの軍隊であった」(前掲書, 299ページ)といい、トロワイヤもほぼ同じ表現をしている(前

- 掲書, 285ページ参照)。なおトロワイヤは、プーシキンのパステーヴィチ軍への従軍を第3部の役人の示唆によるものとしている(前掲書, 283ページ)。
- (20) 第2稿の末尾に「1835年4月3日」の日付が記入されている(Полное собрание сочинений Пушкина, т. VIII, 1940, стр. 1027)。以下この『アカデミー版大全集』からの引用は、文中に巻数とページを(VIII, 1027)の要領で記入する。
- (21) 1828—29年に書かれた手紙には健康が悪いという発言は見あたらず、釈明書にもこの理由は書かれていない。
- (22) このことはトゥイニャーノフが指摘している。彼は、弟とは会えなかったので、理由として説得性がとぼしい、と云っている(前掲書, 199ページ参照)。しかし、弟とは会っている(M. プーシチン, 前掲書, 364ページ参照)。
- (23) А. С. Пушкин. Письма, т. II, 1928, ГИЗ, стр. 67. (以下これからの引用は(書簡II, 67)の要領で文中に記入する)
- (24) 1825年7月すえの手紙の下書, 1820年9月24日付の弟あての手紙を見よ。
- (25) 『紀行』第4章(VIII, 474)に「詩人 Ю.」としてでてくるユゼフォーヴィチの回想。引用は Т. Г. Цявловская. Автограф стихотворения «К. морю». «Пушкин. Исследования и материалы», т. I, 1959, стр. 190.
- (26) Полное собрание сочинений Пушкина, т. 6, 1938, Academia, стр. 199 (以下この版の引用は Academia とする)。この手紙は Ф. И. Толстой 伯にあてられたものであるが、『書簡』IIでは、デルヴィク宛とされ、半分しか掲載されていない。
- (27) エルズルムからの便りとして、デルヴィクがヴァーゼムスキイに知らせたもの(書簡II, 342参照)。
- (28) М. プーシチン, 前掲書, 364ページ。
- (29) 同上, ならびに《Просвещение》, т. 6, стр. 682 参照。
- (30) 「わたしもドンの兵隊のなかにいた／わたしもオスマン兵の群れを追った／戦闘と幕舎の記念に／わたしはうちに革鞭を持ちかえた」(III, 173)。
- (31) М. プーシチン, 前掲書, 365ページ。
- (32) シモンズ, 前掲書, 303ページ。
- (33) Academia. т. VI, стр. 31.
- (34) Брагой, 前掲書, 338ページ。対ペルシア戦争が終りかけていた1827年11月以後の作とされている有名な詩『友人たちに(いや、私はへつらい者ではない)』のなかの「思いがけず皇帝はロシアを／戦争と希望と労働で生きかえらせた」という句も、同様の思想的背景をもっている。
- (35) 詩の草稿「ふたたび我ら、勝利をおさめたり」, 「起て、ギリシアよ、起て」(III, 168, 169)。また1832年にかかれた書評に「ヨーロッパの注意は、ギリシアの運命が決定されたアドリアノーブルに注がれていた……北方の強力な援助がギリシアに独立と独自性を取りもどした」と述べている(Academia, т. V, стр. 352)。
- しかしながらプーシキンはこの戦争を全面的に肯定していたのではない。詩『ハーフィズより(戦いの栄誉にとらわれるな)』『デリバン』に現われているような、戦闘の冷酷な現実面をも見すえている。これをブラゴイは、従軍による戦場体験を

ととしてプーシキンが獲得したものにとらえ（ブラゴイ，前掲書，440ページ参照），トゥイニャーノフは戦争のやり方に対する批判にとらえている（トゥイニャーノフ，前掲書，193ページ参照）。

ついでに云いそえれば，旅行から帰ったプーシキンがロシア軍人の功業をたたえる詩を発表しないという非難に対する反論が、『紀行』序文の(2)の部分であり，戦争の勝利の詩のかわりに諷刺詩をかいたというフランス人の発言に反撃を加えたのが，(3)の部分である。

- (36) 私のこの考えは，プーシキンの露土戦争観に関するトゥイニャーノフとブラゴイの前掲の研究に負うところが大きい。
- (37) デカブリストとプーシキンとの関係については，岩間徹氏の前掲書にくわしい。
- (38) 1828年の従軍志願は，カフカス戦線を希望したというのが定説であるが，願書は2度だされ，2度目は大本営付（ドナウ戦線）であったようにとれる資料もある（書簡Ⅱ，286—287）。また同年4月18日に西欧旅行の相談を友人としており（см. 《Литературное наследство》 т. 58, стр. 76），拒否の知らせを受けた翌21日にはパリ行の許可を願いでている（書簡Ⅱ，50—51）。そして5月にふたたびカフカス行の希望が語られ（см. 《Литературное наследство》，т. 58, стр. 77—78）てからあとは，プーシキンとカフカスを結ぶものはいくつも見つけられる。
- (39) プロツキイ，前掲書，506ページから引用。
- (40) この引用は《Евгений Онегин》，1963，《Детгиз》стр. 255—256からで，ボンディの『解説』のなかに入っている。
- (41) ボンジ，前掲論文，256ページ参照。
- (42) プロツキイ，前掲書，607ページ。なお，金子幸彦氏も否定的見解を示している（『世界文学大系』第26巻，筑摩書房，414ページ参照）。もちろん否定的見解が支配的であるとはいえない。ブラゴイ（前掲書，405ページ），В. Э. Вацуро（《Итоги》，стр. 202—203）は肯定的見解をとっている。
- (43) この時の会見の内容はプーシキンの生前には発表されなかった『紀行』第1章の冒頭部分（VIII. 445—446）に簡単に述べられ，паскеевскихのこと，当時の戦争のことも話題になっている。
- (44) 1833年4月前半のエルモーロフ宛て手紙下書き（書簡Ⅲ，90—91）。プーシキンのエルモーロフに対する関心は，そのほか『カフカスのとりこ』エピローグ，1820年9月24日および1827年5月8日の弟宛の手紙，日記の1834年1月1日の項を見よ。
- (45) 前者は1921年8月21日付のС. И. Тургеев宛の手紙に，後者は1824年1月ころ弟宛にだされた手紙に用いられている（Academia, т. VI, стр. 30, 66）。
- (46) ユゼフォーヴィチの回想から。Т. Г. Цявловская. Указ. статья. 《Пушкин. Исследования и материалы》，т. I, стр. 190。
- (47) Гроссманはこの推量を，カフカス軍の作戦計画と結びつけて述べている（前掲書，328ページ参照）。
- (48) 『序文』第2稿と《РА》に「ロシア貴族として」（VIII, 1026）なる語がつかわれているし，トゥイニャーノフの指摘もある（前掲書，203—204ページ）。